

Title	遊仙枕上ノ一夢ナルカナ：柏木如亭の『吉原詞』について
Sub Title	On Yoshiwarashi, the poem by Jotei Kashiwagi
Author	新谷, 雅樹(Shinya, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.278- 300
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0278

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遊仙枕上ノ一夢ナルカナ

—— 柏木如亭の『吉原詞』について

新谷 雅樹

一

江戸後期の漢詩人・柏木如亭の自筆稿本「如亭山人題跋¹⁾」の中に、不可解な一文がある。なにが不可解か。まず、問題の文章を引用することから始めよう。短いものだから、左に全文を写す。(本稿における引用文はすべて、漢字は新字体・通行の字体を用いた)

偶讀沈草亭「留贈女郎中葉」詩卷。唐人館中光景可想。吾謂是一韻事、不得不跋。乃拳筆欲書。客曰、「夫黯然銷魂。非宴席娛樂之時。縱令彼此情趣相同、語言殊東西。女郎非冠山、定知當是着急時、只把瞠目呆口訣別耳」余不覺失笑、扠袖而起、瓶花為之散然。²⁾

文化七年（一八一〇）の冬、如亭は讃岐に遊んでいる。例によって例のごとく「詩ヲ売り画ヲ鬻³グ」のが目的であったが、その旅先でたまたま、稀覯の詩巻を寓目する機会を得た。すなわち、唐医・沈璠が遊女・中葉に贈った「女郎・中葉二留贈ス」という詩巻である。この遊歴は「売詩鬻画」のかたわら、書画探訪をかねた旅でもあったので、これは願ってもない眼福であった。「跋セザルヲ得ズ」技癢をおさえかねた如亭が、この詩巻に跋を付そうとしたのには、むろん、それなりの訳がある。が、それを言ってしまう前に、話の順序として、沈璠と中葉について触れておこう。

古賀十二郎の『丸山遊女と唐紅毛人⁴』によると、沈璠、字は魚石、一字草亭、姑蘇の人。延享初年より宝暦の頃まで長崎に来往していた清医であるが、長崎淹留中に福濟寺住持であった唐僧・大鵬和尚の難病を治して以来、すこぶる名医の評判を取ったという。たとえば、文化元年（一八〇四）に、長崎奉行所詰を命ぜられて赴任した大田南畝が、「崎館賤臆跋」の中で、こう記している。

「国初以来、支那之医、来我崎港者、蓋数十人。寛永有金華陳明德、遂帰化、変姓名、曰穎川入徳、……元文有沈草亭、陳元璞。……頃年有胡兆新振名者……」⁵

ここで南畝は、上は寛永の陳明德から下は元文の胡兆新にいたるまで、来舶した十四名の唐医の名をあげているが、なかに沈草亭の名も逸していない。陳明德といえ、我が国に帰化して穎川入徳という日本名を名乗ったことで知られているし、また胡兆新といえ、長崎遊学中の市河米庵が師事したほどの能書家であり、しかも『清国医事問答』（別名『清医胡兆新問答』）を残したほどの刀圭家である。これらの「彼ノ医ノ我ニ来ル者」に伍して、沈草亭の名があるということは、彼の医名が高かったということの証しだろう。草亭が来崎した時期を、古賀十二郎は延享初年（一七四四）より宝暦（一七五二—一七五五）の頃であると言ひ、大田南畝は元文年間（一七三六—一七四一）であると言ひ、両説に若干の相

違があるが、いまは細かい穿鑿はしない。いずれにしても、宝暦十三年（一七六三）の生まれの如亭とは、年齢に開きがあるものの、ほぼ同時代の人であると言っている。

沈草亭は医家としてはもとより、詩家としても重きを置かれたようだ。ことは「長崎名勝図絵」の「唐館」の項に収録された「梅蕊二首」「納涼二首」「次韻盆蘭」「和看菊感懷十首」「和秋夜旅懷」（合わせて十八首）の吟詠について見れば、ほぼ察しがつく。加えて書家としても名があつたようで、前出の『丸山遊女と唐紅毛人』によると、書は楷・行・草いずれにも妙を得ていたという。であれば、詩書画をはじめ、瓶花、煎茶、囲碁にいたるまで、万事、唐風が尊ばれた時代のことであるから、来舶清人の墨蹟が珍重されたことは想像に難くない。たとえば、江戸後期の医師・小石元俊の究理堂には沈草亭書「午焙茶七絶」一幅が所蔵されていたし、また大田南畝の「一話一言」(巻五十)によると、尾張鳴海の素封家・下郷氏の別荘だった小山園には遷喬門があり、そこに掲げられた額は沈草亭の揮毫だという。さらに「音曲口伝書」によると、草亭は音律も解したようで、二代目竹本義太夫の浄瑠璃の妙なることを伝え聞いて、わざわざ賛辞を呈している。それが「唐人沈草亭の文書」という書幅で、門弟の順四軒が大切に蔵していたという。こうして見てくると、草亭の詩巻や書幅が愛蔵に足るものとして、各地の書香の家に伝えられていたことが分かる。

以上のことから推して考えると、如亭が讃岐で寓目したという沈草亭の詩巻も、おそらくは、讃嘆措くあたわざる名品に属したであろう。これはぜひとも題跋をつけねばなるまい。如亭がそう思ったとしても不思議ではない。これが先に、本詩巻を披見した如亭が技癢をおさえかねたと言った、理由の第一である。

一方、沈草亭の狎妓・中葉についてだが、嬌名一時に鳴った芸妓であったにもかかわらず、長崎丸山町の遊女であったこと、そして、おそらく唐人屋敷に出入りを許された唐人行の名妓であつたろうということ以外に、詳しい行実は今

に伝わっていない。どのような名妓であつたのか、惜しいかな、それさえも分からないのである。⁽¹⁰⁾

しかし当時、二人が流した浮き名は、少なくとも風流人士の間には隠れもなかったようで、たとえば大田南畝の戯詠に、こういうのがある。「いにしへの沈草亭が中葉にもをとらぬ千代のきく的一本」⁽¹¹⁾これは長崎丸山町の名妓・千代菊が描いた菊の画を見て、それに題したという三首のうちの一首であるが、こういう一席の即吟にも詠まれるほどだから、ありし世の遊女・中葉の艶名は、後々までの語り草だつたのだろう。

おそらく如亭も、兩人の風流逸事はすでに聞き及んでいたではない。「偶々沈草亭ノ『女郎・中葉二留贈ス』ノ詩巻ヲ読ム」題跋の書き出は単刀直入である。この「留贈」の詩がどういう内容のものであつたか、残念ながら伝存していないので詳細を知る由もないが、如亭はこれを一読して、「唐人館中ノ光景、想フベシ」と述べている。その光景というのは、ありていに言えば、唐人屋敷における男女交情のありさまにほかならない。改めて言うまでもなく、長崎丸山は当時、江戸吉原や京都島原と名を競つた艶跡である。もちろん如亭自身は、音に聞くだけで、ここに足を踏み入れたことはない。しかし若い頃、吉原に流連荒亡した如亭は、われとわが身をもつて花街柳巷の表裏に通じていた。たつぷり元手をかけた嫖妓遊興の結実が、艶詩の連作『吉原詞』で、それは一躍、彼の詩名を高からしめた。そういう如亭が、「女郎・中葉二留贈ス」を読んで、どう思ったか、もう言挙げするまでもないだろう。「是レ一韻事ナリ」つまり、如亭はこの詩に典型的な「文人狎妓」の主題を見たはずである。これならばもう手馴れたテーマで、すでに胸に成案はある。「跋セザルヲ得ズ」と、如亭は思わず筆硯を引き寄せたのも無理はない。これが先に、技癢をおさえかねたと言つた、理由の第二である。

しかし、それはにべもなく拒否されてしまう。そもそも題跋とは、機縁の文芸である。これぞと思う詩、文、書、画、

典籍、器物に巡り会ったとき、触発の筆はおのずから伸びるだろう。ところが、その機縁を初手から断たれたのだから、これでは如亭ならずとも、忿然として席を立たざるをえない。「袖ヲ払ツテ起チ、瓶花、之ガ為メニ散然タリ」振り払った袖の勢いが余つて、抛げ入れの花がぱつと散ったという。これはまた、ずいぶんどきりとさせられる小説的な結末である。世の中に、こういう題跋があるだろうか。

二

加藤周一氏の『日本文学史序説』下(ちくま学芸文庫)によると、江戸の漢詩が「日本化」した形態の一つとして、もっぱら遊里を詠う竹枝の流行があげられるという。そうかもしれない。いま手元に『吉原詞集成』¹²という影印本がある。市河寛齋の『北里歌』、柏木如亭の『吉原詞』、菊池五山の『続吉原詞』、大森快庵の『楽国雜詞』、町庵散人の『続々吉原詞』、長谷川城山の『芳原竹枝』、佐藤六石の『芳原新詞』『芳原余唱』など、いずれも今では入手困難な吉原竹枝詞集を集めて一本に仕立てたもので、江戸後期から明治中期にかけて出された類本を鳥瞰するのに甚だ便利な集成である。さて、あらためて本書を通読するとき、このように狭小な世界の描写に終始する連作詩が、百年もの長きにわたり、競うようにして作られつづけたということに対して一驚を禁じえない。それは日本漢詩の一奇観と称してもいいだろう。この隆盛のさがけとなったのが寛齋の『北里歌』で、如亭の『吉原詞』がその驥尾に付し、五山の『続吉原詞』以下はその響にならったものにすぎない。後々まで「前有寛翁、北里之歌清新。後有柏郎、吉原之詞麗娟」¹³と賞揚された所以である。

天明七年(一七八七)のこと、市河寛齋は昌平齋の啓事役を辞して野に下ると同時に、吟詠に専念するため江湖詩社

を興した。盟主・寛齋の下に集まったのが、柏木如亭、大窪詩仏、菊池五山などの俊英たちである。(このとき、寛齋は三十九歳、如亭は二十五歳) 彼らが詠じた新しい詩は、「我江戸今日之詩、河寛齋唱之、柏如亭、窪詩仏、池五山和之」⁽¹⁾と言われたように、江戸の詩壇を風靡して、従前の詩風を一新する。元禄・享保以来の護園派の余風を一掃してしまふのである。由来、荻生徂徠、服部南郭をはじめとする護園派は、明の李攀竜らの古文辞格調の主張に拠つて、もつぱら擬唐詩をこしらえていたが、それは格套にこだわりの、旧習になずんだものに墮していた。どだい、唐の詩に倣えと言われても、天下太平の世の中に辺塞詩を吟じ、佳麗三千人の後宮のないところで宮詞を詠じたところで、一片のリアリティーもともなわない。おりしも、作詩人口(あるいは読詩人口)が土から農工商の庶民にまで広がりがつあつた頃で、そういう実業層出身の詩人(あるいは読者)から、いかにも現実ばなれした擬古の詩は敬遠されはじめていた。

こうした弊風は改めなければならぬ、と考えていた詩人は二三にとどまらなかつたが、最初に詩風刷新の旗幟を鮮明にしたのは山本北山である。彼は天明三年(一七八三)刊の自著『作詩志毅』⁽²⁾において、徂徠門流の詩を「唐詩ノ贗物」「剽襲模擬」であると口を極めて批判した。北山の詩論の拠つて立つところは、ほかでもない、李攀竜を排した明の袁宏道の性霊説で、古人の剽窃をしりぞけて清新の辞をもちいよ、性霊すなわち自己の真情から出た「誠ノ真詩」を作れ、と説いたのである。

この清新性霊の詩説は江戸の詩壇に迎えられたが、その実作は江湖詩社の詩人たちの手によつて始められた。寛齋ら師弟は写實的で平明な宋詩のスタイルに依つて、詩材を人事風俗の諸事に求めた。俗中に雅をさぐつたわけである。たとえば、彼らはしばしば飲食のことを詠じた。寛齋は霞ヶ浦の魚を贈られたときの喜びを詠んだし(「所贈」)、如亭は信州の蕎麦に対する賞賛を惜しまなかつたし(「蕎麦歌」)、詩仏は新鮮な牡蠣を堪能したという詩(「食蠣房」)を作つたが、

とくに食通をもつて任じた如亭は、盛んに食味を詠歌の組上に載せた。その集大成とも言うべき著作が、口腹の快樂を謳った『詩本草』である。擬唐詩全盛の昔、徂徠・南郭とは別に一家の見を立てた祇園南海は、「宋朝二至り、アラユル俗趣ヲ工ナリトシ、東坡二至リテ、又専ラ飲食ノコトノミヲ言フ、卑陋ノ中ニ尤卑陋ナルコト、可惡、可嘆」ときつく戒めたものだが、このように厳格な詩論を顧みたとき、この詩風刷新における江湖詩社の功績は絶大であった。

詩に作つてならないものはない。そう考えた寛齋は、いきおい遊里にも材を求めた。話は前後するが、天明六年（と推定されている）に、寛齋は日本初の竹枝詞集である『北里歌』一冊を上木している。前出の『吉原詞集成』の解題によれば、「寛齋作る所の北里歌三十首を彼の知友二十三家が書し、これに磯田湖菴斎の挿画二十一面を配した詩画集」で、画期的な出版であった。これが門下にあたえた影響は無視できない。出版の十三年後、弟子の大窪詩仏が、「寛齋先生作北里歌三十首、以見性靈之詩莫不可言者、舒亭吉原詞・娛庵深川竹枝、皆是其所權輿也」と回想しているが、社中の詩人にとっては、師の『北里歌』三十首は先駆的な詩作であつて、性靈詩の拡充を試みる実験であつた。後進に道を開いて、「權輿」と仰がれた所以である。

しかし、それはきわどい実験であつた。天明六年というと、寛齋が昌平饗啓事役を辞職する前年ことで、啓事役（學員長）という立場上、また江戸の儒林、文苑に重きをなした大家である手前、このような艶詩を实名で公けにするのが憚られた。そこで「玄味居士」という、いかにも戲号然とした匿名に隠れて、この詩画集を発表するほかなかつたわけだが、こういう戯作者じみたペン・ネームの後ろにひそむ寛齋の韜晦の口は、実はそれほど単純ではない。そうせざるを得なかつた作者の機微については、揖斐高氏の綿密な論考があるので、いまは贅言をひかえるが、ここで注目したのは、『北里歌』自序の「如云淫靡不節、風雅之罪人、余何辭其責哉、余何辭其責哉」という末尾である。最後の最

後で、「余、何ゾ其ノ責ヲ辞センヤ」という反語を二度まで繰り返したのは、先駆者であることの矜持だろうか、それとも躊躇だろうか。これが即空観主人・凌濛初だったら、「淫靡不節」の物語を書いておきながら、「作意は勸戒にあるので、『風雅の罪人』ではない」と言いぬけただろう。よくある手である。しかし寛斎は、あくまでも小説作者ではなかったし、また、このように見えすいた口実も使えなかった。

むしろ、こうした寛斎以後の竹枝流行に対して快く思っていない学者、文人はざらにいた。「近年は竹枝詞おこなはれて、狭斜淫佚の状をばからず、軽薄をほこりて風流とするにいたれり。にが／＼しく詩道を汚す風雅の罪人にぞありける」これは津藩の儒官・津阪東陽の『夜航余話』⁽²³⁾中の一文であるが、これは当時の竹枝作者に対する批判の典型と見ていいだろう。東陽といえは、江戸詰めの一時期、寛斎、詩仏などと詩酒徴逐したこともあるのだが、そういう間柄にして、こういう酷評があるのである。実のところ寛斎は、「風雅の罪人」という責めに甘んじるところか、密かにそれを怖れたのではないか。

三

しかし弟子の如亭は、あえて「風雅の罪人」たらんとした。

柏木如亭（一七六三—一八一九）、名は昶、字は永日、通称門作、江戸の人、代々幕府小普請方大工棟梁職の家に生まれた。つとに詩文の才あり、二十五歳のとき市河寛斎の江湖詩社に参加、社中の逸材と目されて、『木工集』（寛政五年頃刊？）を処女出版した。しかし、詩人としての将来を囑望されながら、盛んに遊里の吉原に出入して家産を蕩尽したあげく、世業の棟梁職を擲って放浪の旅に出た。

先にも触れたように、新進の如亭の詩が最初に注目を集めたのが『吉原詞』三十首で、それは師の『北里歌』三十首の驥尾に付したものだ。揖斐高氏の『柏木如亭年譜』⁽²⁴⁾以下「年譜」と略称によれば、如亭がこの連作を作ったのは寛政元年（一七八九）の頃と推定されている。だとすると、『北里歌』刊行の約三年後、そして江湖詩社結成の約二年後に、早くも『吉原詞』の作詩があつたということになる。打てば響くような文学的投合であつた。

終生の友・葛西因是の回想によると、⁽²⁵⁾如亭は幕府から少なからぬ俸禄を受けて、暖衣飽食の生活を送っていたし、また十八大通の一人・文魚とも交際があつたほどだから、⁽²⁶⁾遊里や芝居に入れあげるほどの潤沢な資力があつたようだ。だからというべきか、如亭は若い頃から家業には身をいれず、⁽²⁶⁾烟花風月の遊びに耽つて、放縦な振る舞いが多かつたという。ここにいう「烟花風月の遊び」とは、具体的には吉原通いのことであるが、当時、空前の發達を上げていた遊里・吉原は、江戸の通人たちに「慾界之仙都、昌平之樂園」⁽²⁷⁾と持て囃されていた。わが如亭もこの慾界の仙都に入り浸つて、風流の罪過を重ねたことは言うまでもない。それはもう身をあやまつほどの耽溺で、おそらくこの不行跡がたたつて、幕府の大工棟梁職を辞任せざるをえなかつたのだろう。それだけに、『吉原詞』の連作に示された官能的措辞は他の竹枝作者の追隨を許さぬものがあるが、この連作は単に詩人本来の繊艶な詩才に磨きをかけたものというだけではない。その隨所に、新しい写実の目が行き届いているのである。ここでは一首だけ、わざわざ訓読するまでもない、平明な詠み口の詩を、例としてあげておこう。

「舞閣歌楼連續夢、夜深無処不春情、誰知戶外秋風滿、明月橋頭擣紙声」⁽²⁸⁾

夜も更けて春情一色の遊郭、しかし、外では秋風が吹き募る。わびしい紙砧をうつ音が風に運ばれてくるが、それに気をとめるものもない。ところで、この音は吉原に程近い山谷辺に紙を作る業者が多かったことによるものだという。⁽²⁹⁾この夜中まで孜々として働く生産の世界（＝山谷）と、浪費することしか知らない非生産の世界（＝吉原）との対象。それは遊蕩のさなかにあつても覺醒せざるをえない、詩人の写実精神によつて捉えられたもので、この詩によつて『吉原詞』が単なる遊里讚歌ではないことを示している。若くして生産を事としなかつたという如亭⁽³⁰⁾にして、こういう吟詠があつたわけである。

話は飛躍するが、「体貌閑麗、放縱不拘、略無才学、善作倭歌」（『三代実録』元慶四年五月廿八日の条）と伝えられた平安朝の業平像は、江戸時代の如亭像と似かよつところがある。如亭も業平のように輕薄才子で、身を用なきものと思ひなしたのか、『吉原詞』作詩後数年にして、あれほど沈湎した溫柔郷の吉原に背を向けて、ふと漂泊の旅に出る。三十歳⁽³¹⁾の晩春のことである。

これ以前のことだが、如亭は「逢人愧問吉原詞⁽³²⁾」という七絶を、性靈詩の主唱者で、市川寛齋の師に当たる山本北山に呈している。これは若い詩人の自嘲と自負が入り交じつた詩なので、この言葉を額面どおり受け取ることはできない。『吉原詞』は決して一時の戲詠ではなかつたからである。という証拠に、二十数年に及ぶ遊歴生活中にも、如亭は詩句の彫琢を忘れることがなかつた。中には改作されて別の詩と化したもの、そればかりか、「割愛」されたものさえあるようだ。結局、この連作はもともと三十首あつたのが、ぎりぎり二十首にまで切り詰められた。その改作推敲の軌跡は、左⁽³³⁾にあげる資料に明らかである。

- ① 無窮会図書館平沼文庫蔵の新樂間叟『間叟雜録』に録された二十三首（『新潟県史』資料編11所収）
- ② 文政九年（一八二六）に刊行された中村仏庵、宮沢雲山編『崑岡炎余』に収められた二十三首。
- ③ 都立中央図書館蔵の写本『桂園叢書』第二十九に収められた二十三首。（揖斐高氏の調査によれば、『崑岡炎余』の写本という）

④ 揖斐高氏蔵、写本『如亭山人詩初集』に収められた二十首（『江戸詩歌論』所収）。

⑤ 伊達貫一郎氏蔵、如亭自筆『吉原詞詩卷』二十首。

⑥ 守安俊二氏所蔵、如亭自筆『詩本草々稿』に収められた二十首。

⑦ 山下徹氏蔵、写本『詩本草』の二十首。³²⁾

⑧ 如亭没後三年の文政五年に、梁川星巖によつて上梓された版本『詩本草』の二十首。

右に列挙したテキストを見れば、『吉原詞』が若書きの詠み棄てではなく、生涯にわたる詩作だったということが分かる。ざつと数えてみても、はじめて寛齋の『北里歌』三十首に倣つて『吉原詞』三十首を作った頃から、京都で客死する前年まで、およそ三十年もの間、新興のジャンル・遊里詩の完成を目指していたのである。このような如亭の執心を考えたとき、また『北里歌』は一時の戯手に出たものだという寛齋の述懐を考えあわせたとき、同じ竹枝体の連作とはいへ、師の『北里歌』と弟子の『吉原詞』は似て非なるものと言わざるをえない。

ちなみに、文化十一年の冬、長崎遊学を終えた寛齋は、たまたま江戸に帰る道中で、零落した如亭と邂逅している。『年譜』によると、師弟の再会は、東海道島田宿の文雅愛好家・桑原苾堂邸で果たされたい。その際、寛齋はとも

に帰ることを勧めたが、如亭は同道しなかった。そのとき師に呈した作にいう、「君身本有彫梁屋、笑我蘆辺独奇踪」³⁵と。先生とわたくしでは、まるで境遇が違ふと言っているのである。いっしょに江戸にもどれば、詩壇の長老・寛斎の助力で、吟社の一つでも興して門戸を張れたかもしれないのに、弟子は恩師のお供をせず、この年の暮れ、師に遅れて江戸に舞いもどる。それは何か心あつてしたことなのかどうか。その帰路の作に、「一束残書当五車、久淹留処且為家、断無喜報閒身到、笑謝夜灯頻結花」³⁶という。一生を漂泊の詩人として終える覚悟が、すでにできあがつていたようである。ときに寛斎は六十六歳、如亭は五十二歳。以後、師は押しも押されぬ老大家として幸福な晩年を送ったが、弟子はといえば、またぞろ江戸を後にして、相変わらず口の為に駆られて西へ東へと奔走している。師弟はもともと進むべき道を異にしていた、と言うほかない。

四

話をもどそう。右の①に示した『間叟雑録』は、越後遊歴中の如亭と懇意になつた新楽間叟が、寛政十一年（一七九九）に、江戸の知友に宛てて書き送つた紀行文の一種であるが、この間叟の手録による二十三首が、現存する『吉原詞』の中で一番古いものである。ちょうど、幕吏の職を辞して、出雲崎に流寓していた間叟は、同じ旅宿の身である如亭に對して、いたく同情を示し、「詩は上手なり、おしき才子也、放蕩と不遇にて今ハ雲水の一孤身となりたり」と、その近況を伝えたくて、「吉原詞ハ得意の作也」と述べている。³⁷やはり、そうに違ひない。『吉原詞』は、生前、刊行を見なかつたものの、初作当時から自他ともに許した自信作であつたに違ひないのである。でなければ、多年にわたる執着の説明がつくまい。

ところで、天明九年（一月改元寛政元年）頃には三十首あったのが、寛政十一年には七首うしなわれている。それはなぜか。十年の歳月がそうさせたのか。三十首を載せたテキストも伝存しないし、如亭自身の言及もないので、その間の事情は見当もつかない。

一つの手がかりとして、初作から三十年近く経ったものだが、⑥の自筆『詩本草々稿』（文政元年）の巻末の文章について見よう。「余少時嘗墮在酒海肴山于北里之中、作吉原詞三十首、頗為同臭所賞。爾來糊口四方、稿亦散落。……今録所記者二十首、以附卷末」これを単純に読むと、旧作三十首は諸方遊歴中に詩稿も散り散りになってしまい、いま記憶するのは二十首だということになる。しかし、この言葉もそのまま受け取るわけにはいかない。もちろん、長い間に「散落」してしまったものもあるだろうが、①から⑧までの改稿の過程をつぶさに見ていくと、一語一句の推敲は言わずもがな、もとは二首であったものを一首にまとめたものもあれば、配列、順序を入れ替えたものもある。こういう徹底した彫琢の過程で、あるいは削除してしまった詩もあるのではないかと、思われる節もある。友人の高岡秀成や葛西因是(38)によると、如亭は自詩の選別には厳格を極め、自らよしとしないものは潔く捨て去ったという。とすれば、『吉原詞』においても、作者は多を求めず、精を求めたのではないか。つまり、長い年月をかけて、三十を二十に昇華させたと考えたいのである。

文化五年（一八〇八）の夏、江戸から京都へ向かう西上の旅の途次で、如亭は東海道四日市の伊達筆亭（字は子奥）宅に長逗留していた。当地の名望家である筆亭は、無類の名士好きで、来訪した文墨の士を温かく迎え入れて、揮毫を求めるのが常だったという。そういう筆亭に所望されて、如亭は『吉原詞』を書きあたえているが、そのときの心境を『如亭山人題跋』に、「緑窓雨過、深院闕寂。偶為子奥書吉原詞。忽々二十年前揚州之夢、為此被復喚、將起來。戊辰夏

仲、于日涉園中」と書いている。

まったく驚いたことに、この『吉原詞』が今日も伊達家に伝わっている。それが⑤の『吉原詞詩巻』で、日本文化研究会の坂井輝久氏によつて初めて紹介された。それによると、如亭肉筆の詩巻は「卷子本に仕立てられており……詩二十首とこの段の跋文を記している」という。私は写真によつてしか目にすることがないが、くだんの詩巻は如亭らしい秀媚な書風で、一見して、凜とした名品と見受けた。また詩二十首も、練りに練られた⑧と同水準の完成度を示している。これはもう、単に遊歴文人が身過ぎ世過ぎのために書いたものではない。④の二十首を収めた写本『如亭山人詩初集』が文化三年頃のものであるということを考え合わせると、このあたりから、如亭は連作『吉原詞』を二十首の作品として完結させようと思ひ定めていたのではないか。

市島春城の「渠かれの吉原詞④」によれば、文化十四年（一八一七）の秋、如亭は越後に再遊して、与坂の三輪家に寄寓した。その折、主人の求めに応じて、ここでもまた『吉原詞』二十首を揮毫している。それは二枚折の屏風に書かれていたそうだが、その題識には「少時嘗墜酒海看山于北里之中。作吉原詞数十首。爾来糊口百万。詩稿散落。今為快亭。書所記者二十首。勿々追懷往事。亦遊僊枕上一夢哉。丁丑菊月。如亭山人。於越後与坂」とあったという。これは⑨に収められた二十首の前書きに相当する「余少時嘗墜在酒海看山于北里之中、作吉原詞三十首、頗為同臭所賞。後不復作此種詩、餬口四方、稿亦散落。不復知近日都知屬阿誰也。追憶往事、亦遊仙枕上一夢哉。今録所記者二十首、以附卷末」という文章に近似している。彼の『吉原詞』はもう、完成一步手前であった。

何にもまして、二十首の全体の構成は緻密である。それは屏風に例えていえば、貼り交ぜのように雑然としたものではなく、月次のように首尾一貫したものである。繰り返すが、二十首は決して一時の戲手に成るものではない。その時

系列的な物語性については、前出の坂井氏の綿密な論考⁽⁴⁾があるので、それに譲ろう。ただ、ここで注目したいのは二十首の詠い初めと詠い収めである。

「月暗長堤去路遙、竹輿桐屐換華鑣、女閨門内明于昼、金屋粧成幾阿嬌」(其二)

「新辞南曲向循墻、命薄于雲真可傷、正是嫦娥落塵世、月宮從此滅清光」(其二十)

ともに⑧の二十首から引いたが、④から⑧に至る改稿において、文字の異同はあるものの、それぞれの歌意は動かない。詠い初めでは、日没の日本堤を通って吉原の大門をくぐると、さらびやかな不夜城の別世界が現前する。しかし詠い収めでは、さしもの全盛を誇った花魁も、ついに御菌黒溝に沿った下等の遊女屋・切見世の女郎に落ちぶれてしまう。たとえば①の二十三首では、「偶辞南曲入循墻、命薄情多独自傷、正是嫦娥落塵世、月宮從此滅蟾光」(其十一)とか、「多情遇謫向循墻、身上旧衣猶帶香、照子縁郎空典尽、一泓盆水了朝妝」(其十二)とか、別々に詠われていたものが、最終的に⑧の「新辞南曲向循墻……」の一首に凝集される。これによって、華やかだった遊女の淪落が詠い収めに収斂されていくわけだ。「吉原詞」の詩人はこうすることで、第一首と第二十首とが、ちょうど一枚の硬貨のように相表裏するものだと示したのである。

ところで、この「新辞南曲向循墻」という起句は、唐の孫榮撰『北里志』にある次の一節を踏まえる。「平康里。入北門、東回三曲、即諸妓所居之聚也。妓中有錚錚者、多在南曲、中曲。其循墻一曲、卑屑妓所居、頗為二曲輕斥之」⁽⁴⁾この『北里志』は、清の余懷撰『板橋雜記』など、後世の香艷花史類の筆頭に立つ作品である。してみると如亭は、自作

の吉原風俗詩を、『北里志』『板橋雜記』の流れをくむものだと思つていたということになる。そういえば、『板橋雜記』の作者に対して、四庫館臣は一掬の同情を示しながら、「風雅之罪人」という評価をくだしていた。もちろんマイナスの意味おいてだが、この「風雅の罪人」という評語くらい、如亭にふさわしいものもないだろう。ただ太平の逸民・如亭にとつて幸いだったことは——繁華を極めた長安の艶跡・北里も、金陵の艶跡・旧院も、いずれも孫榮、余懷の存命中に終末的動乱によつて滅亡したのに比して——当時の江戸吉原はまだ繁榮を誇つていたということである。それだから、「復々近日ノ都知ノ阿誰ニ属スルカヲ知ラズ」などと呑気なことを言えたり、また「往事ヲ追憶スレバ、亦タ遊仙枕上ノ一夢ナルカナ」などと甘い夢に耽つていられたわけである。というより、如亭は個人的時間の推移を凝視するあまり、歴史的時間の推移など念頭に置かなかつた。このことは忘れずに、付け加えておこう。

五

『如亭山人題跋』を読むと、かねて如亭は、多くの書画の名品が讃岐の地に伝わっているという噂を聞いていた。評判によると、明の蘭瑛の画までであるという。そこで、高松に住む文人・後藤漆谷などを頼り、文化七年（一八一〇）、船に乗つていよいよ讃岐へ旅立つ。この遊歴中に、偶然あるところで、沈草亭の「留贈女郎中葉」という詩巻を見た、ということとは本稿の冒頭ですでに触れた。『吉原詞』の詩人は、これを理想的な才子佳人の風流韻事と見て、ぜひ跋をつけねばなるまいと筆を取つた。しかし、所藏者はそれをこぼむ。その言い訳がまだるっこしくて分かりにくい。いま試みに口語訳して、左に掲げる。

「中葉は暗い顔をして沈んでいました。宴席娯樂の時ではなかつたからです。たとえおたがい気持ちと同じでも、言葉

は日本と中国では違います。遊女の中葉は岡島冠山ほどの語学力を持っていなかったもので、この気ぜわしい別れの時にあたって、ただ目を見張り、口を開けるといふ驚きのそぶりを示すことで、訣別の意を伝える以外にないと、そう思つたに違いありません」

これが不承知の言い訳になるかどうか。清人の名墨を持つていほどだから、所蔵者はきつと、当地では有力な文雅愛好家だつたに違いない。その愛蔵品に跋を付そうとする如亭は、いくら名の通つた詩人とはいへ、所詮、「田舎わたらい」の文人にすぎない。せつかくだが、詩巻のよごれだと拒否すれば、それですむものを、右のように持つてまわつた言い方をしてゐる。迂遠な謝絶の仕方だと言わざるをえない。

それにしても、詩人の自尊心が傷つけられたことだけは確かである。失笑をもらして、その場を立ち去るほかあるまい。そもそも問題の詩巻が伝わっていないので、また所蔵者が何者なのか明らかにされてないので、この一文は非常に理解しにくい。だいいち、詩冊にも画巻にも付かなかつた文章は、もう題の跋のとは言えない。ところが、この宙に浮いてしまつた跋文を、如亭はわざわざ『如亭山人題跋』の草稿に書き留めてゐる。不可解である。意に満たぬ自作は、思い切りよく捨てた詩人が、あえてそうしてゐるからである。なにか執着するところがあつたのだろうか。

おそらく、当の詩巻を読んだ如亭は、そこに典型的な「文人狎妓」の主題を見たはずで、『吉原詞』の作者としては、何か気の利いたことを書き付けたかつたに違いない。しかし所蔵者は、奇妙な断わり方をする。要するに、言語不通の馴染みと別れなければならない、遊女の悲哀を思つてみよ、と言うのである。本当に、所蔵者がこんなことを口にしたのだろうか。想像を逞しくすると、事実は単に、当人自慢の逸品に他人の筆が入ることを嫌つた、というだけのことかもしれない。この題跋は小説的だと先に述べたが、袖を払つて席を立つたとき、その勢いで抛入れの花が、ぱつと散

ったという。こうお誂え向きに、花が飛び散ってくれるものかどうか。こういうところにも、私は如亭の作意を感じるのである。

「文人狎妓」の主題は、中国でも日本でも、当時の詩文にありふれたものだった。それを、ありふれたものにならないために、如亭は『吉原詞』に対して、推敲の上に推敲を重ねたのである。そのライフ・ワークともいべき長い創作の過程で、いつしか、ある種の苦い反省がきざしていたのではないか。同じく遊里詩を作った詩人でも、師の市河寛斎や詩友の菊池五山などは、あれは昔の弄筆にすぎないと弁解している。なんとと言っても彼らは、詩壇に重きをなした、人生の成功者なのである。それに引きかえ、自分は老いてなお旅の空で、土地土地の色町に遊びつつ、若い頃、評判を取った『吉原詞』に固執している。人が見れば、いい気なものである。「遊女の身にもなってみよ」もし、くだんの所蔵者がそういう言辞を弄して拒絶したというなら、彼は如亭に対する痛烈な批判者である。しかし、かりにこの批判的言辞が如亭のフィクションに出るとしたら、それはただちに自身の戯画となる。いずれにせよ、ほぼ編年に並ぶ自筆草稿『如亭山人題跋』中に、この題跋ならぬ題跋が見えるのである。

ときに如亭、四十八歳。この八年後、足溜まりにしていた京都において、⑥の『詩本草』の草稿が一応の完結を見た。その巻末に、ほぼ三十年にわたる営々苦心の作『吉原詞』二十首を収めたのである。長い遊歴の疲労と風流の罪過が重なったせいか、持病の水腫を悪化させていた如亭は、すでに死期を悟っていた。再会した年下の友人・梁川星巖に、『詩本草』の出版を託してから程なく、とある京都の借座敷で、とうとう寒酸孤独の生涯を閉じた。享年五十七歳。没後三年、『詩本草』刊行。前にも引いたが、この二十首の前書きで、如亭は「往事ヲ追憶スレバ、亦夕遊仙枕上ノ一夢ナルカナ」と述べている。故郷の江戸を遠く離れて、吉原の消息にも疎くなっていた老快樂主義者は、この一夢をなん

ど反芻したことだろうか。晩歳の作「贈妓」にいう、「糸竹場中度幾春、青蛾紅粉作迷因、年踰五十情思断、僅薄青楼薄倖人」と。ここで言えるのは、若き日の遊蕩の回想が晩年の老衰と密接だったということである。

六

如亭は若い頃から、「ゆく所として色をもつてあやまらざるはなし」（『間叟雜録』）と言われた。しかし、そういう蕩児の側面ばかり強調するのは公平ではない。諸方遊歴中、詩人として、あるいは画家として、千山万水を跋涉しているうちに、「身外皆詩料、秋林獻好髮、幽人袖手立、不覺袖將穿」という幽人の詩境にも達していた。ときには遊里も妓女も忘れて、こういう忘我の境に心を遊ばせたのである。

忘我といえ、如亭は独り詩作の場に引きこもると、「遊治少年」から「謹叅書生」に豹変し、夜を徹して詩句を練ることに没頭した。そして、この「苦吟搆思、百練千鍛」してやまない一途な創作の姿勢を、生涯、持ち続けることになる。これを三昧境というべきか、いや、むしろ詩に淫したというべきだろう。「老來事事尽顛狂、但有吟詩不肯忘」これが、世間を踏み破るようにして生きてきた男に残された、ぎりぎりの道であった。ほかはどうでも、詩作だけは忘れまい。そう思い定めて、ひたむきに詩に淫した結果の一つが、どうしても『詩本草』に収録せざるを得なかった『吉原詞』ではなかったか。ところで、数年前、私は守安俊二氏宅において、氏の所蔵にかかる如亭自筆『詩本草々稿』を見る機会を得たが、推敲の跡も生々しい連作二十首とその肉筆を目の当たりにしたとき、ある不思議な感銘に打たれた。この『吉原詞』の詩人はあくまでも個性に踏みとどまって、ついに個性を突きぬけるといえることがなかったのではないかと。

苦吟派の如亭には、年末に祭詩を執り行う習慣があったらしい。というのも、「擬取一年吟咏卷、亦供薄酒祭詩神」という詩を残しているからである。それは中唐の苦吟詩人として有名な賈島の例にならったものである。賈島と如亭が時空を異にしている詩人同士だ、ということは言うまでもない。しかし、ともに「一世ノ詩窮」というだけでなく、一方は貧しさゆえに余儀なく僧籍に身を置いた時期があり、一方は地方遊歴のため僧形に身をやつたという点で似かよ。が、どちらも仏道に帰依する心が深かったとは思われない。ともに多情多感の人、賈島のある詩句を借りて言えば、「解空ノ人」（「哭柏巖禪師」）ではなかったのである。

この稿を閉じるに当たって、私は三好達治の「故をもて」（岩波文庫『三好達治詩集』）という詩を引く誘惑を禁じ難い。「故をもて旅に老い／故をもて家もなし／故をもて歌はあり／歌ふりて悔もなし」

これくらい、漂泊の詩人・柏木如亭の墓誌銘するに足る言葉もないだろう。前出の星巖によると、最晩年に仕上げた『詩本草』は、「山人最愜心之筆」⁽¹⁾だったという。もちろん、この中には『吉原詞』も含まれる。よくよく如亭らしい逸話と言うほかないのだが、臨終の言葉は、「寺町へ」というものだったそうである。寺町とは曾遊の地・新潟の色里のことである。⁽²⁾もし、そういう如亭を白玉楼中にたずねて、故をもてある歌とは？ ふりて悔いもない歌とは？ と質したら、物憂い顔を振りむけて、そうさね、三十年もかけて打ちこんだ『吉原詞』二十首だよ、と答えるに違いない。

註

- (1) 守安俊二氏蔵「如亭山人題跋」(これは市島春城旧蔵にかかるもの)
- (2) 日本文化研究会「如亭山人題跋注解(抄)」第八回、「太平詩文」第三十号(太平詩屋 二〇〇四年一月)所載。このシリーズは雑誌「太平詩文」に連載中のもので、如亭題跋の唯一の注解である。なお、筆者も日本文化研究会の一員である。
- (3) 「雜興」三首 其三、「如亭山人遺稿」卷二、揖斐高氏編「柏木如亭集」(三樹書房 一九八一年六月)所収。以下、とくに断わらない限り、如亭の『木工集』『如亭山人稿初集』『如亭山人遺稿』『詩本草』からの引用はすべて本集によった。
- (4) 古賀十二郎著、長崎学会編「丸山遊女と唐紅毛人」前編(長崎文献社 一九六八年八月)
- (5) 「杏園集」、「大田南畝全集」第六卷(岩波書店 一九八八年二月)所収。南畝はこれ以外にも、『蘆の若菜』『向岡閑話』『一話一言』などで沈草亭について言及している。
- (6) 長崎史談会編纂「長崎名勝図絵」(一九三二年四月)
- (7) 「究理堂書画目錄」、京都府医師会編『京都の医学史』資料編(思文閣出版 一九八〇年八月)所収。
- (8) 「小山園記」「柿靈祠」、「大田南畝全集」第十六卷(岩波書店 一九八八年六月)所収。なお、『尾張名所図会』(大日本名所図会第一輯第八編 大日本名所図会刊行会 一九一九年一月)によると、釈大典や芭蕉など数々の文人墨客がこの小山園に杖をとどめたという。
- (9) 順四軒編著『音曲口伝書』、『近世芸道論』(岩波書店 一九七二年一月)所収。また大田南畝の『蘆の若菜』(『大田南畝全集』第八卷所収)にも、「文正翁は……。長崎に来れる清人沈草亭、その音曲を称して文を贈れり」とある。
- (10) 註(2)に同じ。
- (11) 「長崎丸山町遊女千代菊が菊の画に」『千紅万紫』、『大田南畝全集』第一卷所収。
- (12) 齋田作樂編「吉原詞集成」(太平書屋 一九九三年四月)
- (13) 「芳原新詞自序」、前掲「吉原詞集成」所収。
- (14) 「今四家絶句亀田鵬斎序」、富士川英郎等編「詞華集日本漢詩」第十一卷(汲古書院 一九八六年七月)所収。
- (15) 池田四郎次郎編『日本詩話叢書』第八卷(龍吟社 一九九七年六月復刻再版)所収。

- (16) 『詩学逢原』卷之下「雅俗」、前掲『日本詩話叢書』第二卷所収。
- (17) 「詩無不可作者、只在上下其格耳」、崑岡炎余所収「北里歌十二首」に付した寛斎の後序(前掲『吉原詞集成』所収)
- (18) 『詩聖堂詩話』、前掲『日本詩話叢書』第三卷所収。
- (19) 揖斐高氏「竹枝の時代」、『江戸詩歌論』(汲古書院 一九九八年二月)所収。「遊治と性霊」、『遊人の抒情』(岩波書店 二〇〇〇年八月)所収。
- (20) 同右。
- (21) 前掲『吉原詞集成』所収。
- (22) 「二刻拍案驚奇小引」、「二刻拍案驚奇」(上海古籍出版社 一九八三年九月)所収。
- (23) 揖斐高氏校注『夜航余話』卷之下、「新古典文学大系65」(岩波書店 一九九二年八月)所収。
- (24) 前掲『柏木如亭集』所収。
- (25) 「如亭山人稿初集葛西因是序」。葛西因是撰「柏山人碑」、五弓雪窓編『事実文編』卷五十五(関西大学東西学術研究所「日中文化交流の研究」歴史班編、関西大学出版広報部 一九八〇年三月)所収。なお、この柏山人碑は日暮里養福寺に建つ。
- (26) 「訪文魚」『木工集』
- (27) 余懷『板橋雜記』「雅遊」。本書には山崎蘭齋訳、桑孝寛句読の和刻本(明和九年刊)があつて、これは後に『唐土名妓伝』と題を改めて広く流布したようである。引用はこの和刻本の初刻の影印(太平書屋 一九九七年八月)によつた。
- (28) 『吉原詞』二十三首 其十、前掲『吉原詞集成』所収。
- (29) 揖斐高氏『詩本草』箋注 その十一、「太平詩文」第十四号(太平詩屋 一九九九年八月)所載。
- (30) 前掲「如亭山人稿初集葛西因是序」
- (31) 「奉呈北山先生」『木工集』
- (32) 『間叟雜録』(『新潟県史』資料編11(新潟県編集発行 一九八三年三月)所収)、前掲『詩本草』箋注 その十一、前掲『年譜』、前掲『江戸詩歌論』、前掲『如亭山人題跋注解(抄)』第三回等参照。
- (33) 長野県須坂市在住の山下徹氏は、柏木如亭が信州で結成した晚晴吟社の一員・高梨聖誕の御子孫である。先年、山下氏の

蔵から『詩本草』の写本が発見された。氏の御好意によつて、これを見る榮に浴したが、これは誰かが如亭自筆の原稿を謹写したものとおぼしく、一見、如亭の筆跡とよく似ている。この草稿については、いずれ機会があれば、詳しい報告するつもりだが、⑥の如亭自筆『詩本草々稿』と⑧の『詩本草』の刊本との中間にあるものらしい。刊本が出る前に、早くも写本の形で信州に伝わつて、もとの晚晴吟社の社友の間で、『詩本草』が読まれていたようである。

- (34) 註(17)に同じ。
- (35) 「途中奉迎寛斎先生帰自長崎幕中」『如亭山人遺稿』卷二。
- (36) 「雜興」七首 其三、『如亭山人遺稿』卷二。
- (37) 前掲『間叟雜録』
- (38) 「木工集高岡秀成序」、「如亭山人稿初集葛西因是序」
- (39) 前掲『如亭山人題跋注解(抄)』第三回。
- (40) 『芸苑一夕話』下(早稲田大学出版部 一九二二年四月)
- (41) 註(39)に同じ。
- (42) 「海論三曲中事」『新校北里誌』(世界書局 中華民國六七年十月)
- (43) 『四庫全書總目提要』卷一四四 子部五四 小説家類存目二。
- (44) 『如亭山人遺稿』卷三。
- (45) 「題画」十二首 其四、『如亭山人遺稿』卷二。
- (46) 「如亭山人遺稿頼山陽序」
- (47) 「木工集高岡秀成序」
- (48) 「逢木百年」『如亭山人遺稿』卷二。
- (49) 「除夜」『如亭山人稿初集』
- (50) 「書懷」『如亭山人稿初集』
- (51) 「詩本草梁川星巖識語」
- (52) 「年譜」文政二年七月の条。